

# ボランティア・ニュース 第11号 2008.11.1 発行

## ボランティアの皆さん

ボランティアの会会長 在田一則

朝夕は冬の気配も感じられる頃となりましたが、ボランティアの皆さんもそれぞれにご活躍のことと思います。

さて、しばらく開店休業状態だったボランティアの会事務局は新たな気持ちで活動をポツポツ始めています。といいますのは、昨年初め頃、ボランティアの会の構成員についてボランティアの会(事務局)と博物館側と認識の違いがあることがわかり、博物館側との話し合いや新旧事務局メンバーを中心にしたボランティア

内での話し合いを行ってきたからです。その間、今後の会のあり方がどうなるかわからないという状況もあり、また、事務局の怠慢もあり(このほうが主因ですが)、ボランティア・ニュース発行や談話会開催などボランティアの会は開店休業状態あったことをお詫びいたします。しかし、この問題も博物館側と合意に達し、心機一転活動再開となりました。

以下にこの間の経緯を説明し、新たなボランティアの会の活動に皆さんのご協力をお願いする次第です。

## これまでの経緯:

北海道大学総合博物館ボランティア活動員(ボランティアの正式名称)の制度は2001年に発足しました。

その後、ボランティアによる博物館への協力をより円滑に行うために、またボランティア同士の連携と親睦を深めるためにボランティアの会を作って欲しいとの働きかけが博物館側からあり、2003年に当時中心的に活動していた人たちが会を立ち上げ、同年2月21日に総会が開催され、ボランティアの会会則が定められました。

発足の経緯から、また当時はボランティアの数が現在(146名)に較べるときわめて少なかったという事情もあり、ボランティアの会や博物館側にはボランティア活動員に登録された人が皆ボランティアの会会員という暗黙の了解がありました。その後、ボランティア活動員も増え、それぞれの分野の活動も活発になり、マンモス展(2005年)・モンゴル恐竜展(2006年)・ファール展(2007年)では分野の枠や年齢の枠も超えて、皆さんが展示解説に、監視役に、誘導員にと大活躍し、会員相互の交流が進みました。

## 博物館との話し合い:

2008年春頃からボランティア活動員についての考え方がボランティアの会と博物館側とで相違することが明らかになりました。その後の話し合いの中で、2008年6月に博物館側から「ボランティア・マネージメント担当の教職員の体制が整ったことから、これまでボランティアの会事務局にご協力いただいていた名簿整理や、見学コーディネートを教職員が担当することになった。このように博物館の体制が整い、またわずかながらボランティアの会に入会していないボランティアもいらしたことから、これまでのご協力に感謝した上で、今後のボランティアの会はボランティアの発案で形成された有志からなる親睦の集まりとして新たに考えていただきたい」との見解が出されました。

有志であるか全員参加であるかは会としての活動の

あり方にも関わることから、新旧事務局員を中心とした会員同士や博物館側との話し合いを数度行いました。その間には、ボランティアの会発足の経緯や当時のボランティアの会会員資格についての認識が創立当時の事務局メンバーからその後の事務局メンバーに明確に引き継がれなかったこともあり、博物館側との話し合いのなかで混乱が生じ、話し合いは長引いてしまいました。ボランティアの会事務局としては、博物館側との話し合いのなかで、ボランティアの会を全員参加の団体として認めて欲しいと希望しましたが、博物館側の「ボランティア同士の親睦を意図してボランティアの発案で結成された有志の会として新たに考えていただきたい」という見解は変わりませんでした。

## 事務局の考え:

博物館側の最終結論をうけ、新旧事務局メンバーを中心に今後どうするか検討しました。ボランティアの会を解散してもよいのではないかと意見もありました

が、やはり、ボランティアによる博物館への協力をより円滑に行い、またボランティア同士の交流と親睦を深めるためにはボランティアの会は必要であるということになり、会員有志で構成するという博物館側の見解を

受け入れざるを得ないという結論に達しました。

その後の博物館側との話し合いで、「既にボランティア活動員となっている方々は、談話会やボランティア・ニュースなどボランティアの会の情報をこれまでメーリングリストや郵送でお伝えしてきた実績があることから、ボランティアの会会員と認め、今後ボランティア活

動員となる人については本人の意思でボランティアの会に入るか否かを決めていただく」、「博物館はボランティアの会の活動にたいしては今までどおり協力・援助を行う」ということになりました。

## 再出発するボランティアの会：

今後の新規登録者から、博物館側がボランティアの会の紹介をし、事務局が入会を勧誘するということになります。自動入会ではなく、自分の意志でボランティアの会に入らせていただくことになるわけですからそれだけ会員としての自覚を持っていただくということになります。と言っても、事務局としては、会員の皆さんに会員としての活動を強制するなどということはまったく考えておらず、いままでどおり自由な集まりと考えています。つまり、ボランティアの会は会員が各自の意思で

参加する任意の会で、基本的には情報交換の場、親睦の場であると考えています。したがって、例えば、ボランティアの会が行うボランティア談話会などの活動に参加する、しないは自由で、強制されるものではありません。しかし、事務局としては、事務局の運営やボランティアの会としての独自の活動もありますので、できるだけ多くのボランティアの方々に事務局活動をサポートしていただきたいと考えています。

さて、体制は明確になっても、ボランティアの会独自の活動がなくては、会を作る意味がありません。事務局では、現在ボランティアの会会則を作り直すことを考えていますが、会の目的はいままでと変わりなく、北大総合博物館の博物館活動が円滑に行われるよう博物館に協力することであり、その協力が効果的にできるように体制を整えるとともに、会員相互の交流と親睦を図ることです。このような目的を達成するためのボランティアの会独自の活動として、会員相互の交流を深める、励まし合って持続的に活動できるような環境を作る、情報発信をする、活動のレベルアップを図る、な

どを“気持ちは全員参加”で今まで通り企画し、実施していきたいと考えています。ボランティアの会にふさわしい企画があったら、提案をお願いします。

なお、ボランティアの会への入会の有無によってボランティアの皆さんを区別するというのでは決してありません。ボランティア・ニュースや行事のお知らせなども、とくにお断りがないかぎり、ボランティア活動員全員にお知らせします。

また、既にボランティア活動員に登録している方で、再出発のボランティアの会には入りたくないという方はお知らせいただければ幸いです。

### 2008年度の活動状況

- 2008. 5 2008年度総会
- 2008. 7 談話会(在田会長) & フォンディユパーティー
- 2008. 9 談話会(阿部永先生) & おでんパーティ
- 2008. 10 野幌森林公園さきのこ & 昆虫探訪会(久万田敏夫先生・小林孝人先生)
- その他 ボランティアの会のあり方について検討会数回

## 各分野の活動紹介コーナー

皆さんが活動している様子を分野のボランティアさんから紹介してもらおうコーナーです。投稿を歓迎します。

### 化石クリーニングで考える

全く無知のままクリーニングに入って3年半過ぎたが、つくづく考えさせられることが多い。作業そのものは、化石をなるべく壊さないように岩石を徐々に取り除いていくだけのことだが、化石が必ずしも外殻のはっきりしたものとは限らないし、いろいろの化石が重なっている所もあるし、外殻のはっきりしないものが突然頭を出してくる場合もある。

目下、夕張で発見された白亜紀層の化石クリーニン

### 石橋七朗(化石グループ)

グを何ヶ月も続けているが、これで完成とまでなかなか行かないのが現実です。しかし顔を出してきたアンモナイトもいろいろ種類があるし、そばにくっ付いている形のはっきりしないものも、多分、軟体動物のひとつではないかと思うのだが、名称も全体像もどうも判明せずきている。

一億年前後の海底が今では陸上となり、その当時の海成層の姿が次第に現れてくると、これらの海棲生物

がどこから現れ、そしていつ頃なぜ滅びていったのか。また削り落としている岩石片の中にも形のはっきりしない微生物もたくさんふくまれているのでは？と思いがらのクリーニングを行っています。

クリーニングの実施は根気と時間との闘いです。現れてくるものへの期待感と古生物からの情報入手などが大事となるのですが、次々と発見される新資料によって、際限のない迷路を歩いているようなものです。それだけ謎の多い楽しみが出て来ます。

## 黒曜岩展示について

第54回企画展示として、アインシュタインドーム下の回廊で開催中の黒曜岩展示について、展示に至った経緯等については、「展示解説板」・「博物館ニュース17号」等で、既に皆様はご存知のことと思います。ここでは、展示されている黒曜岩標本の入手作業・整理作業などについて、上記の解説・ニュースではあまり触れていない点、またボランティア活動として、いかに関わったかという点に主眼を置いて述べてみたいと思います。

黒曜岩標本は、鳥取大学名誉教授吉谷昭彦先生から寄贈されたものですが、実際には、先生が一度、上士幌町の「ひがし大雪博物館」に寄贈され、その中から、一部を北大博物館に寄贈されたものです。

吉谷先生は、長年にわたって日本全国のみならず海外の黒曜岩についても採取研究されています。また、上士幌町十勝三股は「十勝石」の別名を有するとおり、黒曜岩の主産地であり、黒曜岩の研究が一段落された平成14年(2002年)に、それまで標本採取などで交流のあった、上士幌町の「ひがし大雪博物館」に、先生が研究のために収集された国内外200カ所におよぶ産地の黒曜岩標本をその研究成果資料とともに寄贈されました。



「ひがし大雪博物館」は、上士幌町立の自然博物館で、有名な糠平温泉街にあります。昭和45年(1970年)に開設され、35年以上の歴史を有する博物館ですが、この度、諸般の事情で閉鎖されることになりました。博物館の閉鎖にあたり、貴重な標本の散逸を心

## ボランティアによる館外活動・他博物館の紹介コーナー

### 富士山の森林限界と玄武岩溶岩について

地学団体研究会第62回総会の巡検の中に富士山巡検があり参加しました。

樹海は雨模様で遠望できなかつた。しかし、青木ヶ原に広がるヒノキ純林にコメツガを伴う樹林の地面は溶岩で、この下には所によって風穴がある。そのひとつに入ってみると家の柱ほどもある氷が地面から上に伸びている。床は凍結していて非常に危険であった。この柱は冬には1メートルに成長するらしい。この氷柱は暗闇の中にある。周りにある溶岩は多孔質で玄

もしも、このクリーニングを考えながら行いたい方は、私のような初心者であっても、その年代の生物や自然の状態や変動を考えようとする中で、作業そのものへの不思議さと面白さや諸生物の絶滅がピンチであると同時に新しいものへの発生のチャンスとなる不思議さを考えることで意味ある作業になることでしょう。

(石橋さんは今年89才になります。当会の最長老ボランティアさんです。)

### 安田 正(化石・地学グループ)

配された吉谷先生が、「ひがし大雪博物館」と相談の上、北大博物館への寄贈の申し出をされた次第です。

黒曜岩標本の引取り作業は、平成19年8月の初めに、松枝先生・箕浦研究員とともに寺西・安田2名の会員が「ひがし大雪博物館」に赴き、別途来られた吉谷先生と合流して行いました。実質的な作業は、上記2名の会員が、吉谷先生直接のご指示の許、博物館の収納庫にある全標本の中から寄贈を受ける標本の抽出作業です。全標本は、収納庫に積み重ねられたビール瓶ケースのようなプラスチックの箱、約200個に産地・採取箇所を明記したビニール袋につめて収納してあり、抽出作業は、それら産地・採取箇所を確認しつつ、ほぼ全体を網羅するように、メモをとりつつ、また抽出した標本には産地・採取箇所を書き写しつつ行う作業で、作業終了には実質2日間を要しました。この間、約200個のプラスチック箱に収納された数千点の標本から、細区分で約400地点、約1500点の標本を抽出し、別途書庫に収納されていた研究成果資料とともに北大博物館に搬入しました。



北大博物館に搬入した標本は、産地を北海道・東北・九州など7つのブロックに分類・整理し、各標本のナンバリング、リスト作成などの登録収蔵作業を行いました。この登録収蔵作業には、寺西・安田のほか、納富・甲山・岡田・神村会員が加わり、約1ヶ月を要しました。

### 星野フサ(植物グループ)

武岩であった。

船津胎内樹型洞穴を作る岩石はやはり玄武岩で滴り落ちた様子が壁に観察された。御中道の植生は奥庭火山列とともに観察できた。玄武岩火山弾の広がる裸地にパイオニアプラントのダケカンバとカラマツが成長しこの根元で成長したシラビソが陽樹と背比べをしていた。ここ富士山にはハイマツがないことが特筆される。宿舎は美智子皇后由来の「国立中央青少年交流の家」であった。



## Mrs. Keene Akiko 北大へ再び

佐藤昌介初代北大総長のひ孫に当たられる Keene Akiko さんが Washington DC から来道されました。平成20年8月25日正午のことです。前総合博物館長の藤田正一名誉教授と新千歳空港に出迎えました。JR札幌駅に着いて直ちに北大総長を表敬訪問、続いて附属図書館へ、夜は岩手県人会の歓迎会に出られました。翌26日は、佐藤昌介さんが初代校長(1934-1938)を



## 沼田 勇美(展示解説グループ)

していた月寒の八紘学園を初めて表敬訪問。理事長・河田校長など同校幹部が総出で歓迎してくれました。八紘学園は1930年に栗林元二郎氏が創立し月寒東に82ha、日高門別には220haもの実習農場を有する2年制の農業専門学校。全寮制学生寮(食費無料)もあり、月寒ジンギスカン・花菖蒲園が有名です。学園の表敬訪問が終わって、里塚霊園の佐藤昌介さんのお墓をお参りました。



## 企画展の紹介

### 南極写真展『剥き出しの地球—南極大陸』

2008年10月28日(火)～

11月12日(水)



## 編集後記

この度、博物館との新しい関係の下に「ボランティアの会」が再出発することになりました。この新しい関係のあり方をめぐっては博物館側との議論もありましたが、もちろん「ボランティアの会」内部の議論も何度かありました。「ボランティアの会」内部の議論の中では、もはや「ボランティアの会」は必要なしとして、会を解消しようとの意見もありました。しかし、ボランティア会員相互の交流・親睦の場として「ボランティアの会」を残したいという意見が根強く、結局は再出発が決まったような次第です。現在準備中の新しい会則には、この「会員相互の交流・親睦」が「会の目的」として明記されるはずですが、現在約12の分野グループに分かれて、146名のボランティアが活動しているとのこと。あなたはどんな

分野グループがあり、どんな会員が、どんな活動をしているかご存知ですか？あなた自身、さらに異なった分野グループでも活動してみようとは思いませんか？種々の企画展の準備などに積極的に参加し、他分野の会員と交流してみませんか？年に一度開かれる総会に出席し、会員相互のみならず、博物館スタッフとの交流はいかがですか？随時開催される談話会で、識者あるいは会員の得意分野のお話に耳を傾けてみるのはいかがですか？「ボランティア・ニュース」への活動報告・意見・その他の投稿はいかがですか？会ではより活発な活動を期して事務局員の増員・充実を計画しています。参加してみませんか？お待ちしております！

## 野幌のきのこ

(10月6日のきのこ&昆虫探訪会で撮影しました。)



## ボランティア・ニュース

### ◆編集・発行

北海道大学総合博物館ボランティアの会  
(担当者:星野、沼田、安田、永山)

◆発行日:2008年11月

◆連絡先

060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

ボランティアニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。

<http://www.museum.hokudai.ac.jp>